

混戦型球技選手における方向転換能力と指導者の主観的評価との関連性新垣聖香¹、笠原政志^{1,2}、山本利春^{1,2}¹国際武道大学大学院、²国際武道大学体育学部

【目的】 混戦型球技スポーツの多くは直線的な動きのスピードのみならず、スプリントから素早く方向転換する能力が求められる。特に混戦型球技の中でもバスケットボールやハンドボールのように短いスプリントからの方向転換が多い競技や、サッカーやラグビーのように長いスプリントから方向転換を行う場面も多い競技があることから、競技特性に合わせた測定項目を実施することが望ましいと考える。しかしながら、どの競技においても測定方法として直線走能力に強く依存するプロアジリティテストを用いているケースが少なくなく、実際に指導者が感じる方向転換能力をプロアジリティテストが反映しているかどうかは定かではない。そこで本研究では、多くの現場で方向転換能力の評価として広く用いられているプロアジリティテストと指導者が主観的に評価する方向転換能力との関連性について検討することを目的とした。

【方法】 対象は、混戦型球技を専門とする男子大学生85名とした(サッカー23名、ラグビー17名、ハンドボール(以下ハンド)17名、バスケットボール(以下バスケ)27名)。全ての対象者に対し、体育館フロアにて①プロアジリティテスト、②プロアジリティテスト変法(切り換えしまでの直線移動距離を1/2に縮小したテスト)、③20m直線走の測定を実施した。計測には光電管タイマーを用い、①と②の測定時の切り返し脚を利き脚で切り返すことで統一した。また、対象者が所属するチームの指導者に対し、選手の動きの素早さについて指導者の主観的評価を実施した。評価方法は、主観的に優れている選手を5、劣る選手を1とする1から5までの5件法でのアンケートを実施した。なお、本研究に先立ち、プロアジリティテスト変法の1本目と2本目の値の相関係数は $r = 0.94$ ($P < 0.05$)であり、十分な再現性があることを確認した。分析方法は、ピアソンの相関係数を用い、各測定値と主観的評価結果との関連性について比較検討した。

【結果】 直線走及び各プロアジリティテストの測定値と指導者の主観的評価との関係性について、バスケとハンドでは、プロアジリティテスト $r = 0.38$ ($P < 0.05$)、プロアジリティテスト変法 $r = 0.39$ ($P < 0.01$)と指導者の主観的評価との間に有意な相関関係が認められた。また、ラグビーとサッカーでは、プロアジリティテスト $r = 0.4$ ($P < 0.01$)、プロアジリティテスト変法 $r = 0.34$ ($P < 0.05$)、20m直線走 $r = 0.53$ ($P < 0.01$)と指導者の主観的評価との間に有意な相関関係が認められた。

【考察】 本研究で得た結果から、バスケとハンドにおいて、指導者は方向転換能力を重視し選手を評価し、ラグビーとサッカーにおいては、方向転換能力に加えスプリント能力も含めて選手を評価していることが示唆された。

【現場への提言】 本研究の結果から、混戦型球技の中でも指導者の評価視点に違いがあることから、各混戦型球技選手の特徴に合わせた方向転換能力評価が必要である。